一般財団法人キリスト教文書センター
1957年7月17日第三種郵便物認可 2013年7月1日発行（毎月一回発行）第666号
ISSN 0286-7001

［月刊］キリスト教書評誌

本のひろば

出会い・本・人

『魂の神学』佐藤陽二（アンカークロス出版）との出会い　上村敏文

エッセイ

キリスト教出版、キリスト教書店への提言　川俣　茂

対談書評

A.E.マクグラス、J.C.マクグラス　著／杉岡良彦　訳
『神は妄想か？——無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』
河崎行繁＋西原廉太

本・批評と紹介

大塚野百合　著
「主われを愛す」ものがたり　吉岡康子

末盛千枝子　著
ことばのともしび　松居　直

出村　彰　編
シリーズ・世界の説教
宗教改革時代の説教　村上みか

N.タナー　著／野谷啓二　訳
新カトリック教会小史　高柳俊一

上遠恵子　著
ひかりをかかげて
レイチェル・カーソン　川俣　茂

R.N.ワイブレイ　著／高柳富夫　訳
ニューセンチュリー聖書注解
イザヤ書 40-66章　大島　力

鄭　玹汀　著
天皇制国家と女性　山極圭司

上村敏文、笠谷和比古　編
日本の近代化とプロテスタンティズム
間瀬啓允

鈴木崇巨　著
韓国はなぜキリスト教国になったか
大川従道

ドナルド・K.マッキム　著／原田浩司　訳
長老教会の問い、長老教会の答え2
三好　明

津田謙治　著
マルキオン思想の多元論的構造
有賀文彦

近刊情報

書店案内

7 JULY 2013

新教出版社 〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1 Tel: 03-3260-6148 / Fax: 03-3260-6198
ホームページ：http://www.shinkyo-pb.com

教皇フランシスコ

12億の信徒を率いる神父の素顔

マリオ・エスコバル著／八重樫克彦、八重樫由貴子訳

日本語で読める初の評伝

気鋭のスペイン人ジャーナリストの書き下し。生い立ちから教皇に選ばれるまでを詳しく辿る。カトリック教会の抱える課題と新教皇の方向性も分析。解説は教皇のかつての教え子であるホアン・アイダル上智大学准教授。

6月25日

◆四六判・定価1470円

イエス入門

定評あるオクスフォード大学出版局 Very Short Introduction シリーズ

リチャード・ボウカム著／山口希生、横田法路訳

イエスについて確実に知りうる一切を明らかにしてくれる本書は、キリスト教や聖書に関心を抱く全ての人にとって、最適のイエス入門書となるだろう。

6月14日

◆四六変・定価1995円

新約聖書入門

【新教新書275】

笠原義久著

6月24日

新約聖書の「正典」としての意味、初期キリスト教の多様な流れ、主な文書・記者の神学思想、聖書の写本の話、そして新しい聖書学研究の傾向などを、やさしく解説・紹介した入門書。

◆新書判・定価1575円

主の祈り

講解説教

W・リュティ著／野崎卓道訳

6月24日

第二次大戦の終結直後、ベルリンに赴任するためバーゼルの教会を去る直前に語った、力強い12の説教。巻末には、リュティが自らの生涯を振り返って綴った珍しい自伝的エッセイを付す。

◆四六判・定価2100円

神学の起源

社会における機能

深井智朗著

話題！

古代・中世・近現代に至る歴史を通して、神学の果たした機能の驚くべき変化を追跡。社会と思想のダイナミックな関係に鮮かな仮説を提示した問題作。シリーズ **神学への船出03**

◆四六判・定価1890円

6月21日、電子書籍の配信が始まります。

有馬平吉編

キリガイ

ICU 高校生のキリスト教概論 名（迷）言集

価格は**税込 525 円**、配信元は以下の 23 書店です。▼

エルパカ BOOKS ／ GALAPAGOS STORE ／紀伊國屋書店 Kinoppy ／コープデリ e フレンズ電子書店／ Kobo イーブックストア ／コンテン堂／セブンネットショッピング／ d マーケット　BOOK ストア／ Digital e-hon ／どこでも読書／ TOP BOOKS ／ Neowing ／ひかり TV ブック／ BooksV ／ BOOKSMART ／ BookLive! ／ honto ／本よみうり堂デジタル／漫画全巻ドットコム／ MOBI-BOOK ／ Varsity eBooks ／ eBookJapan ／ BookPlace Cloud Innovations

出会い・本・人

『魂の神学』佐藤陽二（アンカークロス出版）との出会い——上村敏文

「十字架なくば生きる術なし」「神を義とし奉る」「凡（すべ）ての事、相働きて益となる」、この三つを信仰の三要素とされる佐藤陽二氏の『魂の神学』は圧巻である。「神学とは、信仰を厳密にとらえる学問」と冒頭に書かれておられるが、戦前のエリート集団でもあった海軍兵学校七五期の俊英が執筆された小冊子ではあるがどの項目を見ても腑に落ちてくる。『キリスト教入門』『マルコ福音書講解』『使徒行伝講解』『ローマ人への手紙講解説教』等々、多数の著作執筆があるが、そのエッセンスというべきものが凝縮しているのが今回ご紹介した『魂の神学』である。

魂とは一体何か、私自身の長年の疑問であった。この書は、明快にそのことを図解入りで明示している。第一コリント2・10-12を踏まえて、「霊魂の真のエネルギーは、霊魂が神の聖霊を受けた時に与えられる」（五三頁）としている。また魂の働きとして、①愛すること　②思いつくこと　③ひらめくこと　④夢を見ること　⑤良心の働きをすること、としている。その上で、「潜在意識も顕在意識も、その働きの基礎は、魂にある」（九六頁）と結論付ける。「罪を犯す魂は死ぬ」（エゼキエル18・20）という究極の言葉から、主イエスの十字架による罪のあがないを、自分の魂の罪のあがないのためであったと信じた時に、その人は「信仰としての実りとして魂の救いを受けている」（第一ペトロ1・9）と結んでいる。

「『復讐はわたしのすること、わたしが報復する』と主は言われる」（ローマ12・19）により報復ではなく、牧師の道を選びとった故佐藤陽二氏の真骨頂の書といえよう。天に召される約一か月前に偶然お目にかかることができ、会話はかなわなかったが、目と目でしっかりとその確固たる信仰を感受することができた。その信仰が世界キリスト教婦人矯風会加盟ＪＷＣＴＵ名誉会長である佐藤正子夫人始め家族全員に、そして特にご長男の佐藤順牧師（牛込キリスト教会）の『幸福への八つの態度』によって継承されている。二〇〇九年度の青山学院女子短大「キリスト教学」でもテキストとして採用されたが、より多くの一般の方が読んでも魂の奥深くに響いてくる書物である。この偉大な魂が小さくとも夏目漱石の生家近くの住宅街の中に、愛ある家族と教会が結実した。そして、ここで学ばれた淵江淳一氏の『神道とイスラエル古代思想とキリスト道』の博士論文の原稿がここにあった。

（うえむら・としふみ＝ルーテル学院大学准教授、国際日本文化研究センター共同研究員）

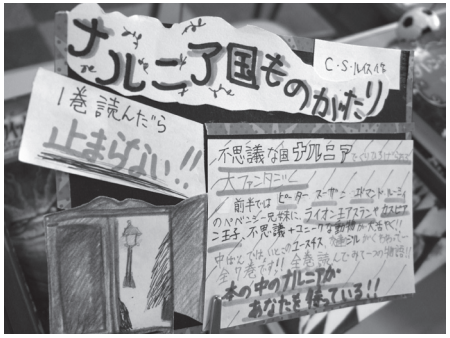
リレーエッセイ

キリスト教出版、キリスト教書店への提言

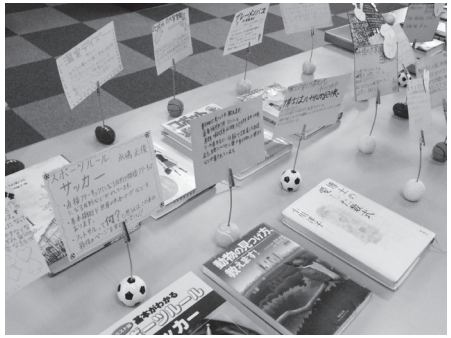
川俣　茂

教会担任教師からキリスト教学校の聖書科教諭に転身して、はや七年が過ぎました。教会と学校の違いをさまざまな場面で実感していますが、その中の一つに「キリスト教書店との関係」「キリスト教書との関係」を挙げることができます。以前、キリスト教書に関係する仕事をしていた者としては「これでいいのかなぁ」と思いつつ、毎日を過ごしています。

ところで勤務校では、「読書教育」「図書館教育」が大変盛んです（特に図書館を利用した調べもの学習）。また、中学ではさまざまな形で生徒の「おすすめの一冊」を紹介する機会が多く設けられています。国語科では夏休みの課題として、総合学習でも中一の早い段階で「おすすめの一冊」を紹介することになっています。特徴的なのは、この総合学習での「おすすめの一冊」は、よく街中の書店で見られる紹介ポップを生徒自身が製作し、それを週替わりで図書館で展示（というより実際にポップとして使用）することになっています。生徒自身が本を読み、そしてその本を紹介する。最近の中学生も機会が減った「本を読む」だけにとどまらず、「本を紹介する喜び・楽しみ」も体感することができるようになっています。中学生が制作したものですから、「中学生らしさ」が随所に現われていますが、数年前には某大手書店で実際に生徒制作のポップを使用していただいたこともありました。また、図書委員が毎月、「図書館だより」を作成し、各クラスで掲示していますが、これも単なる新刊の紹介ではなく、本にまつわる教師へのインタビューなど、こちらもあらゆる角度から「本を紹介する喜び・楽しみ」を実体験することができます。そのためか、勤務校図書館の蔵書数は大阪府下でも有数の蔵書数を誇っており、生徒利用も頻繁です。



さて、そういう学校現場からキリスト教書の分野を眺めてみると、確かに既刊本・雑誌などの売上げが低迷している厳しい現実もあります。そのような中でも、「良書」も数多く出版されています。ただ、そのような「良書」が、キリスト教雑誌などの「広告」や「書評」として取り上げられることはあっても、あくまでも「広告」や「書評」であり、中学生が取り組んでいるような形での「おすすめの一冊」として紹介される場がなく、情報として伝わらないのは残念です。中学生たちの間では、この「おすすめの一冊」を通して、「読書の輪」が広がっていきます。一冊の本を介した「人の輪」、そして人を介した「本の輪」の広がりです。ここでいう「本の輪」というのは、勤務校ではよくあることですが、多くの生徒が同じ本を「おすすめの一冊」として挙げ、一冊の本に対してポップが時には何十枚と制作されることを想定して表現しています。キリスト教書の場合、この「読書の輪」を広げていく大きな、そして重要な役割を担っているのが、各地にあるキリスト教書店ということになります。



「本の良さ」は、手に取り読んだ者にしかわからない部分も持っています。そのような「良さ」が誰にも知られず、埋もれていってしまって、気がついたら「版元品切」「絶版」となってしまうことも少なくありません。「わかる人にだけわかればいい」というものではありません。

店売と並んで配達が大きな割合を占めるキリスト教書店では、ポップを製作して……ということもなかなか難しいかもしれません。しかしポップまではいかなくとも、機械的な文字が並ぶ「新刊情報」よりも、手書きの「おすすめの一冊」、書店の「おすすめ」だけではなく、それこそ「人の輪」の広がりをもたらす読者からの「おすすめ」の方が、より説得力（!?）を持つに違いありません。

「人の輪」、「本の輪」、そして「読書の輪」を広げる大きな働きを担うキリスト教書店。その果たす役割は本当に大きいですよ。

（かわまた・しげる＝清教学園中学高校　中学宗教主事）

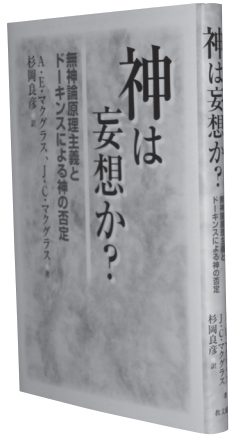
対　談

『神は妄想か？――無神論原理主義とドーキンスによる神の否定』

A.E.マクグラス、J.C.マクグラス 著
杉岡良彦 訳

ドーキンスの『神は妄想である――宗教との決別』への応答

河崎行繁＋西原廉太



河崎　ドーキンスとマクグラスはそれぞれ無神論と有神論の立場から主張していますが、世の中にはそれ以外の立場もあります。特に無色層――これは私が自分で勝手にそう名づけているのですが――の人たちが日本には多くいますが、彼らにとってこの二人の主張はどれだけの説得力があるのだろうか？　このことは考えたほうがいいのではないか、この本を読んでまず思ったのはこのことです。

　無色層の人たちというのは「神はいる」とはっきりと信じているわけではないが、「神は絶対にいない」という確信をもっているわけでもない。たとえば正月になったら初詣に行くが、日常生活においては神のことなんか全く考えない。日本人の大部分はそういう人だと思います。この本の真価を問うには彼らは非常にいいリトマス試験紙になると思います。

西原　私も無色層である日本人がどう受け留めるかというのはたいへん大事な点だと思います。というのは、マクグラスの理論とドーキンスの理論はある種、西洋キリスト教世界の「ジャーゴン」(jargon, 特殊用語) という面があるからです。だから一歩引いて無色層みたいな違う観点からこの本をどう読めるか、というのは一つの大きなテーマになってくるかと思います。

キリスト教と科学

西原　キリスト教世界における科学史的な観点をある程度前提にしないと、ドーキンスとマクグラスの主張に対する議論ができない、議論しにくい、のではないかと思います。たとえば、従来、キリスト教世界では神が書いたテキストは二種類あると考えられていました。

　第一のテキストはもちろん聖書です。聖書を読み、そこに隠されている神のさまざまなメッセージや秘密などを解読する。具体的には旧約聖書はヘブライ語で、新約聖書はギリシア語で、中世になると両方ともラテン語で書かれたので、そういう古典語を使いながら聖書を読み解く。そのことによって神の意図や神の存在など、さまざまな事柄を明らかにしていく。

　同じように数学という言語を通して第二のテキストである、自然や宇宙、人体を読み、そこから神の創造、神秘、メッセージを導き出そうとする。

　コペルニクスやケプラーからガリレオ・ガリレイ、ニュートンに至るまで、彼らの自己理解は科学者ではなくて、神学者であった。実際、コペルニクスはポーランドの大聖堂の首席司祭でしたし、ケプラーも神学者でした。ニュートンは事実上、神学者として聖公会のウェストミンスター寺院に葬られています。

　そういう流れでいくと、結局、神学者と科学者の区別はずっとなかったということになります。ですから自然科学という言葉も最近になって生まれたわけです。

　そういうバックグラウンドの中でドーキンスの主張がどういう意味をもっているのか、それに対してマクグラスはどう反論しているか。その辺を読み解かないと、単なる二人の罵り合いにしか見えない、ということになってしまうかもしれません。

河崎　この本の内容は、「科学界の視点に則ってみても、ドーキンスの論法は粗雑です」ということであって「神は妄想ではない」ことを直接、示しているわけではありません。ですから、マクグラスの本来の主張を知りたければ、『科学と宗教』(教文館、二〇〇三年) を読むと良いと思います。この本でのマクグラスはすごく論証的です。マクグラスの本音はこの本に書かれていると思います。

進化論に対する福音派の態度

西原　マクグラスは聖公会ですが、多少エバンジェリカルなところがあります。立教大学も聖公会です。リベラルから福音主義まで、カトリック的なものからプロテスタント的なものまで、聖公会にもいろいろな流れがありますが、彼はエバンジェリカルです。そこをつきつめていくと、彼自身が批判しているところの宗教原理主義とオーバーラップしてしまう可能性と危険性があると思います。

河崎　マクグラスは聖公会の福音派といわれていますが、私は福音派というと、創造論者だろうと頭から思っていたのですが、この本を読みますと彼は福音派の中には二つの立場がある、と書いています。

西原　そうですね。

河崎　いわゆる創造論者に代表されるがちがちの福音派と、本当に大事なことだけは守るけれども、それ以外のことはあまり気にしない福音派。マクグラスは後者に属しているのだと思いますが、そういう福音派はあるのですか。

西原　はい。マクグラスは福音主義なのですが、極端な原理主義や絶対主義的な立場をとらない、と彼は一貫して主張しています。ドーキンス自身の立場こそまさに宗教原理主義と同様にきわめて欠点が多い歪んだ無神論原理主義、宗教的な無神論そのものである。それゆえ「科学は絶対である」という彼の原理主義をマクグラスは批判します。

河崎　マクグラスから見ると、有神論・無神論とは関係なくドーキンスは彼自身の考えに凝り固まっている。マクグラスは無神論だからと言って、そういう人たちを攻撃しているわけではありません。無神論は無神論なりにいろいろな理解の仕方や世界観がある。それが問題ではなく、世間の人が思考停止になることのほうが危険だ、とマクグラスは言いたいのだと思います。

西原　私もそう思います。そういう意味でマクグラスはたいへん柔軟な指摘をしています。おっしゃるように、無神論・有神論ではなく、原理主義の考え方と方法論に対する違和感が問題だ、と。

問いの立て方

西原　大事な点として彼は解釈の可能性に言及しているのはよく理解できます。自然科学と神学とでは解釈の方法が違います。先ほど申し上げましたように、キリスト教世界においては神が書いたテキストとして私たちは読みます。読み込み、解釈し、理解する。意味を引き出す作業が神学者の務めだったのです。その過程においては解釈者の置かれている文脈が重要になります。

西原廉太 氏

同じテキストでも西洋キリスト教社会で育った人と日本の無色層社会の中で育った人とでは読み方が全く違うと思います。

自然科学の場合は How（どのように）という疑問詞から始めます。神学的な問いの立て方は Why（なぜ）から。真理を探究するということにおいては神学も自然科学も同じ営みである。ただ対象となるテキストが聖書なのか、それとも自然・宇宙・人体なのか。つまり神から与えられたテキストは違いますが、しかしそれを読むという作業は全く同じ、ということです。こういうことをマクグラスは言いたかったのだと思います。だから、神学者と科学者が相対立するのではなく、両者の間での対話は成立しうる。

河崎　どんなに神のことを言っていても宗教というのはしょせん人間の側から見た人間の活動範囲内のものでしかない。人間がそういうふうに宗教をこしらえたが、その中心には神がいる。このことはきちんと押さえたほうがいいと思います。

西原　確かにそうですね。キリスト教の神学では人間を主語にした場合には基本的に受動態になります。私が生きている、とは言わない。私は生かされている、by God つまり神によって生かされている、あるいは命を与えられている。たとえばイザヤ書などでは「息を与えられる」という。大事なのは人間には限界がある、ということです。人間が自分も含め、すべての生命をコントロールしているのではなくて、何か大きな力によって――キリスト教で言えば神になりますが――私どもはここにあるのだ、と。

だから人間が反対したり、決断したり、あるいは何かを支配したりするということは本来、きわめて非神学的なことです。ところが原理主義になってしまうと、人間が主語の能動態になってしまうという危険性があります。

神学にも分からないことがあり、科学にも分からないことがある。人間にはすべてのことは分からないという謙遜さ、批判されることに対して自己を開くこと、自己の理解や考え方を絶対化してそれを原理原則として提示しないこと、そういう姿勢が大事だとマクグラスは言いたかったのだと思います。

特異点

河崎　よく科学では特異点ということを言います。数学的特異点とか。そこはもう分からないから特異にしてしまう。

西原　「特別異なる」ですね。

河崎　これはよく出てきます。たとえば子供たちによく聞かれるのですが、「ブラックホールの内側はどうなっているんですか」「宇宙の果てがあるけれども、その外はどうなっているんですか」と。そういうところは今の物理では扱えないわけです。たとえばビッグバン以前ではすべての物理法則が成り立たないかもしれない、と大部分の人はそう考えています。そうすると、今の科学の特異点の内側は全然扱えないわけです。

科学者というのは始めからそういうことを教えられるわけです。たぶん先生もご存知だと思いますが、私たちが科学の教習を受ける時には既存の理論や仮説を必ず疑いなさい、と言われます。疑うところから始めなさい、と。永遠に続くこの疑いの過程を進むのが科学です。これで「はい、すべて終わりですよ」ということは、少なくともまじめに科学をやっている人はほとんど考えない、まず絶対にいないだろう、と思います。

何をやってもその次は分からない。その意味では私は『西遊記』に出てくる孫悟空

の話が非常に強く心に残っています。世界の果てまで来て、もうここで終わりだと孫悟空自身は思うのだが、実はまたその先がある。

西原　たいへん興味深い話ですね。私が専門にしている聖公会の神学（アングリカニズム）では「私たちは真理を探究する旅人である」ということを大事にしています。真理を探究しながら道を歩み続ける。それは終わらない旅で、その旅の道しるべが聖書であったり、伝統であったり、あるいは人間理性や経験など、そういったものを手がかりにしながら真理を求めて不断に歩み続けていく。そういう意味ではファイナルアンサーはなく、それは神のみぞ知るというわけです。

河崎　何か実験で「分かった、分かった」と思っても、逆にその先の分からないことが増える。

西原　いわゆる天文学上の標準理論と言われるものすらプトレマイオスの宇宙理論パラダイムが、コペルニクスの宇宙論パラダイムに取って代わられる。物理の法則もそうやって展開していく。結局ファイナルアンサーはない。あるのだろうけれども、先生が先ほどおっしゃったブラックホールの中の物理法則と同じようにそれは分からない。

ドーキンスの特徴

河崎　ドーキンスはスポークスマンとしては一流だと思います。『利己的な遺伝子』が彼の最初のベストセラーだと思いますが、この本はとても分かりやすい。ちょっとしつこいですが、書き方がうまい。

西原　ただマクグラスも言っていますが、ドーキンスの論の立て方、引用の仕方が極めて恣意的です。逆に言えば効果的ということになりますが。

河崎　そう。非常に極端な例をうーんと広げて語る。たとえば、元地質学者で今は神学者になっているワイスという人の例。彼は地球には何億年の歴史がある、と頭では理解しているのだが、それが聖書の記述に合わないことで悩みます。その結果「私は神学をとる」と言って科学者をやめた。私の知っている自然科学者でそういう人はいません。たぶんこれは本当にまれな例だと思います。ドーキンスはいかにもそういう人がたくさんいるかのような書き方をしている。マクグラスはまさにそのことを批判しています。

西原　キリスト者からするとドーキンスはどうしてそこまで宗教を嫌うのかが分からないのですが、先生はどのようにお考えですか？

河崎　私の印象では、もともと彼は宗教に対して批判的だったが、「九・一一」によって最後の一押しをされたのだと思います。ドーキンスはこう書いています。あの時にある宗教が別の宗教を攻撃したのに互いに相手の非を全然挙げないで一緒に祈りましょう、と言う。こういう偽善は許されない、と。それ以前の「スコープス裁判」の影響もありますが、「九・一一」がダメ押しになったのだと思います。

　もう一つは進化論に対するギャラップの調査結果です。今いちばん新しいものは確

か一九八二年から二〇一二年までの間に行われたものです。一九八二年の時点では生物は完全に今のまま神が造ったという創造論を信じている人は四四パーセントでしたが、今回の調査では四六パーセント。つまりまったく減っていないのです。それに対して完全に進化論を信じると答えたほうが九パーセントから一五パーセントへと少しだけ増えています。では減ったのは何かと言いますと、「進化論は正しいが、その背後に神がいる」という、いわゆるマクグラスに近い立場です。それがぐーんと減っています。

河崎行繁 氏

　物質文明の極であるアメリカでどうしてこういう現象が起こるか。このことに対してドーキンスはものすごく苛立っている。八〇パーセント以上が進化論を信じている日本にいる私たちは殆どそんなことを気にしませんが、アメリカでは創造論者がまったく減っていません。ドーキンスによるとイギリスでも創造論を信じる人が増えています。進化論は信じるけれどもその背後には神の存在が必ずある、という層が減っていることに対して彼は何か本質的な危険を感じているのです。

西原　実際そういう中で「九・一一」が起こったりすると宗教そのものがむしろ罪悪であるというふうな感覚をドーキンスが持つようになるのはそれなりに理解できます。それは逆に言うと私などのようなキリスト教関係者に対する大きな問いかけなのかもしれません。マクグラスはこのような問いかけを無視せずきちんと応答しようとしているのだろうと思います。

理性的思考と宗教

河崎　マクグラスのように非常に柔軟性がある幅広い宗教的な教えというのはどうして広がらないのか、それどころかむしろ「シュリンク」（shrink, 縮む）している。このことについてはどう思われますか？

西原　おっしゃるとおり確かに理性的な考え方の部分は「シュリンク」しています。でもこのことは歴史において繰り返されています。たとえば、近代においては神学でもシュライエルマッハーなど、合理主義的に宗教を理解する立場は一見、魅力的です。しかしその一方で、説明はできるけれどもそもそもの信仰心や情熱、救いといった本来の信仰的なニーズには応えることができない。そういう中でバルトなどが登場し、もう一度、絶対他者なる神、本来の信仰とは何か、を取り戻す。

　日本でもかなり学歴の高い青年たちがオウム真理教的なものに入信していきますが、それは理性的な宗教理解では現代人の心の

飢えと渇きに応えきれていないのだと思います。

河崎　そうですね。そう感じます。

西原　もっとシンプルで、聖書にこう書いているじゃないか。神はあなたを救いますと言った方が……。

河崎　アピール性がある。私はよく言うのですが、それを見せれば絶対だ、という水戸黄門の印籠のようなものを求める。人間の心理にはそういう傾向が必ずあります。ドーキンスの『神は妄想である』にもよく出てくるテレビ伝道師というのがそこをうまく突いていると思います。彼らはもう有無を言わさず、ただ信じなさい、と言う。有神論か無神論かと言う前に思考停止を強制するそういうやり方は本当に大事なものを隠してしまいます。

まがいものをきちんと取り除き、何が本質であるかを伝える役をマクグラスにはやってもらいたいですね。無色層の人たちが宗教を胡散臭いと思ったり、毛嫌いしたりするのはそういうところがあるからだと思います。

西原　赤ちゃんが生まれたら神社でお宮参りし、お葬式は仏教のお寺でやる。そして結婚式は教会で（笑）。朝のテレビをつけると公共放送で占いをやっていて、それを見て「ああ、今日はラッキー」と。そういう意味では日本人はきわめて宗教的な国民ですね。

河崎　たぶん求めているのだと思います。だから水戸黄門の印籠とは違うものでそれに応えなければいけないと思います。それができない限り表面上は何とか教の信者ですと言いながら実質は空っぽということになってしまう。そうすると今のカルトに簡単につけ込まれてしまいます。

科学と宗教の対話

西原　イスラム世界とかキリスト教世界といった一神教世界とは違って日本はその点ではきわめて緩やかですね。ある意味、理性的に科学と宗教が同じ土俵の上で対話できる可能性があるのではないかと思います。

河崎　むしろ科学と宗教が一体化しているのではないかと思います。私などは完全に昔で言う自然神学から入っています。何か些細なことでも見つけたりしますと、いわゆる「隙間の神」ではなくて「神様はなかなかしたたかだな」と思います。

西原　そうですね。

河崎　先生が最初に言われた二つのテキストというのはすごくよく分かりました。だからどの道から入ってもいいと思います。自分の入りやすい道から入ればいい、と。ドーキンスのように神のことなどを考えずに単に自然の真理を見つけたからうれしい、私はそれでもいいと思います。しかし私にとってはそれを全部とり計らってくれた神がいると考えた方がさらに奥行きの深い喜びがありますね。

西原　ウィリアム・ペイリー的なものの考え方は批判されていますが、でも確かに彼が言っているように、なぜとんぼのめがねはきわめて正確な六角形になっているのか、なぜ人間の体は左右対称なのか、そもそもどうして心臓がここにあって血管が流れる仕組みになっているのかなどはどうやって説明したらいいのか、という問題はあります。

河崎　私は後追いでもいいと思っています。結果を見てからでもいいと思うのです。

ランダムの中である道を選び、その背後に神の計画があると考えることができます。私の専門では「ゆらぎ」とか「ランダム」とかを重要視するのですが、それらに対する神の計画などはない、とドーキンスは言います。でも乱雑や無目的も一つの原理です。「ランダム」だから神がいらないのではなく、そういうシステムを創ったこと自体、あるいは「ランダム」の中から何かを選んだ、というのも神の計画かもしれません。

私が言いたいのは、いろいろな理解の仕方がある、ということです。私は無神論も否定しません。皆そのレベルに応じてそれぞれの理解の仕方があって、それは共存していいと思っています。だから私はドーキンスを否定しません。彼は彼なりの範囲で分かったと言えばそれでいいと思います。ただ他のものは否定（批判ではなく）するというやり方だけはやめたほうがいいでしょう。

マクグラスから学ぶもの

西原　ドーキンスは前カンタベリー大主教とも対話しています。カンタベリー大主教もそうなのですが、ドーキンス的な物言いを無視しないマクグラスの姿勢、かなり早い段階できちんとそれに応答するという姿勢はとても評価できます。

河崎　マクグラスが凄いのは、あえてドーキンスが自分の専門と言っている科学の土俵に入って話をする点です。こういうふうに対話する人は非常に少ないと思います。そういう意味では彼はドーキンスとはだいぶ違い、すごく公平で客観的だと思います。相手の土俵でやるというのは自分にとっては不利なので、そういう立場を取れる人というのは非常に珍しい。だから彼の書くものは科学の立場の人から見ても分かりやすいのだと思います。他の本の記述を見ても非常に理性的です。ただし、無神論者の言う「無限の後退」（無限の能力を持つ神は無限に複雑であって、その結果、その存在確率は無限に低い）を科学の土俵内で論破しようとしていますが、これには無理があります。やはり神信仰に至るには論理を超えた「飛躍」が必要だと思います。

反論をするとき、マクグラスはきちんとドーキンスの本の何ページという書き方をしています。ですから本書の中で疑問を感じたらドーキンスの本を見てその部分を捜せばいい。

西原　訳者もお書きになっていますが、マクグラスは証拠に基づいた議論を大事にしています。だから印象で語ることはなるべく避けて、先生がおっしゃるようにドーキンスの言説を具体的に挙げながら弁証する。この点は私たちも学ばなければいけないのではないかと思います。

（かわさき・ゆきしげ＝
IAS総合科学研究所主任研究員）
（にしはら・れんた＝立教大学副総長）

（四六判・一六〇頁・定価一八九〇円（税込）・
教文館）

賛美歌をとおして主イエスの愛にふれる
大塚野百合著

「主われを愛す」ものがたり
賛美歌に隠された宝

吉岡康子

「花は咲く」と言う「東日本大震災復興支援ソング」が色々なところで歌われています。今年二月に岩手県・宮古市で行われた私の勤務する短大の第四回ボランティア活動においても、学生たちがこの歌を練習し、仮設住宅の集会所、瓦礫処理作業所、また宮古市役所のロビーなどで宮古の方々と一緒に歌いました。作詞者・作曲者共に宮城県出身とのことで、亡くなられた人々と生きている人々の思いや願いが重なり合うような歌詞と美しいメロディを歌うと、今まで元気に明るく話しておられた方々が途中で涙を流され、私たちも涙し、そして最後には笑顔で大合唱になるという経験を何度もしました。歌が慰め、励ましを与え、さらに心を結びつける力があるとあらためて思わされたのでした。

これが賛美歌となれば、さらにその力は強力なものとなります。賛美歌に隠された「宝」――その誕生をめぐる様々なストーリーを研究され、すでに五冊の「賛美歌ものがたり」を刊行された筆者の最新作が、可憐な鈴蘭の表紙写真も美しい本著です。二〇〇四年から続けられているクリスチャン音楽集団ユーオーディア・アカデミーでの「賛美歌講座」でのお話がまとめられたものです。

筆者は情熱をこめて私たちに呼びかけます。

「この『主われを愛す』ものがたり』を通して私が訴えたい事は、「ほんとうに、ほんとうに主イエスは私を愛してくださる」と信じて、喜びに溢れる人が日本に増えることです。本書で取り上げたどの賛美歌も、主イエスが驚くほどに私たちを愛しておられ、それゆえ苦難も死も恐れることはない、と述べています。現在の日本は何よりも主イエスの愛を必要としています。主イエスの愛こそ、日本を動かす霊的エネルギーです」（あとがきより）。

昨年亡くなったホイットニー・ヒューストンの主演映画「ボディガード」は大ヒットし、映画のサウンドトラックはグラミー賞最優秀アルバム賞を受賞しましたが、大ヒット曲「オールウェイズ・ラヴ・ユー」よりも印象的なのは、劇中で、葛藤しあう姉妹がひと時心を通わせてしみじみ歌う「ジーザス・ラブズ・ミー」です。時代も国も超えて広く人々に愛されている賛美歌の誕生ものがたりが本書の冒頭で語られます。作詞者アンナ・ウォーナーは一九世紀はじめにアメリカの裕福な家庭に生まれましたが、二歳にして母を亡くし、父親も恐慌により資産を失い、大変な困窮生活を送ることになり、「生活のため」姉スーザンと同じく小説を書きはじめます。また姉妹の自宅で聖書を学ぶ会を開き、そこには近くにあったウエスト・ポイント米国陸軍士官学校の士官候補生がたくさん集まりました。この姉妹の共著のなかでアンナは姉の提案によって、一つの賛美歌を書きました。「それは日曜学校の教師であったジョン・リンデンが、重い病気に苦しんでいる少年ジョニー・フォックスを両腕で抱きかかえて静かに歌う歌」で、これが「主われを愛す」であったと言われています……がしかし実は……。

さらには、「熊本バンド」生みの親、L・L・ジェーンズは一八七六年（明治九年）一月に熊本城外の花岡山で「奉教趣意書」に、後の日本のキリスト教会のリーダーとなる青年達と署名をし、高らかに「主われを愛す」を賛美したと言われていますが、ジェーンズはウエスト・ポイント陸軍士官学校卒業生で、何と作詞者アンナと実は……という興味深いエピソードが満載です。

読めば賛美する思いも祈りも必ず深くなる一冊です。

（よしおか・やすこ＝青山学院女子短期大学宗教主任）

（四六判・二三二頁・定価一九九五円〔税込〕・教文館）

新刊

聖書学論集45

日本聖書学研究所編

●A5判並製　定価3150円

鉄は鉄を研ぐ
ー箴言（ミシュレー）第II部、第V部におけるレア(rēaʿ I)
加藤久美子

●

申命記史書におけるダビデ王朝
山我哲雄

●

エゼキエル書28章11節～19節におけるケルブ
山畑　譲

●

「福音にのっとった殉教」によるインクルーシオー『ポリュカルポス殉教物語』の文学的考察
浅野淳博

●

聖餐の成立をめぐって
荒井 献

●

カイサレイアのアレタス『ヨハネの黙示録注解』と10世紀のビザンツにおける終末意識について
飯島克彦

●

ヨハネ福音書における贖罪信仰
ー文学的方法による分析
伊東寿泰

●

ルカ福音書17:20-21の解釈
ーとくに ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ ἐντὸς ὑμῶν ἐστιν をめぐって
本多峰子

●

「父の家」（神の家族*Familia Dei*）
ーヨハネ福音書における「家族」メタファーとその意味
三浦　望

LITHON［リトン］
〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

ことばのともしび

至るところ共感の喜びを覚えた人生論
末盛千枝子著

松居　直

この本を手にしたとき、著者の末盛千枝子さんは、まさに『ことばのともしび』そのものだと感じました。

末盛さんに初めてお会いしたのは、至光社の編集者として絵本の企画・編集・普及に全力をつくしておられたときでした。私もまたその頃は、福音館書店の創業のころで、編集責任者として絵本・児童書の編集・出版に全力投球していました。そして末盛さんの仕事に対する熱意と意志の力、また鋭い感性と豊かな使命感に強く心をひかれました。

この『ことばのともしび』を読んで、改めて末盛さんの人としてのまた女性としての生きる力が、どのように養われ、磨かれ、また人々に大きな喜びと光とを与えるにいたったかを、生き生きと感じることができ、共感するとともに、新たにこの「ことばのともしび」によって、心のともしびをかきたてることができました。

末盛さんは語られます。

〝私は子どもの本の仕事をしています。それは、たぶんプラス思考が好きだからです。子どもに与える本は、子どもたちが人生というものを、どんなことがあっても「生きるに値するものだ」と思ってくれるようなものでなくてはなりません。

ですから、子どもに本を読んでやりながら、慰められたり励まされたりするのは実は大人の方だというのは、よくあることなのです。

どんなに辛いことに出会っても生きていこうとすることができるのは、その人の中にプラス思考があるからです。そしておそらく、それこそが信仰というものではないでしょうか。〟

末盛さんご自身の人生経験の深さは、本書の巻末のあとがきにかえての「人使いの荒い神さま」に記されていますが、私の読後感は、この著書はまさに末盛千枝子の人生論そのものだという、感銘を受けました。いたるところに共感の喜びと、生きる力とが与えられ、みことばへの信仰が、〝光あれ〟と与えられます。

〝優しさは、どんなことを言うのでしょう。何かに出会ったときに、イエスさまだったらきっとこうなさっただろうとか、こうすることを私にお望みではないだろうかと思って、行動することです。

それは「愛」という言葉と、ほとんど同じではないでしょうか。またそれは、「想像力」とも密接に関係があるのです。優しさとは、相手の立場になって考えてみるということだからです。〟

この「優しさ」について語られた文章を読んだとき、私は『コリントの信徒への手紙』Ⅰの第十三章を想い、〝信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。〟と、私自身が毎日の祈りの中で唱える聖句を思い返しました。

また東日本大震災の後に、末盛さんは《3・11絵本プロジェクトいわて》の活動をはじめられて、その思いを次のように語っておられます。

〝人は、大変な悲しみに出会った時、その気持ちをすぐに片付けてしまうことができるのでしょうか。私は、そうではないと思います。充分に悲しんだ人に、やっと希望が、しかも、少しずつ希望が見えてきて、やがて、気がつくと立ち上がっているのではないのだろうか。希望するとは、そういうことなのではないかと思うのです。〟（註、歌代幸子著、現代企画室刊『一冊の本をあなたに』の末盛千枝子〝あとがき〟による）

私自身は現在まさに、後期高齢者そのものです。しかし神さまが与えてくださる恵みは、生きることだと思います。歳をとることについても、末盛さんは語ります。

〝年をとることのすばらしさの一つは、いろいろな経験が、特に苦しく悲しい経験が、結局自分を育ててきたという実感を持てることではないかと思います。そのとき、人は、そのさまざまな経験が自分を育ててくれたことを思い、周りの人たちの存在がどんなに大きな励ましになっていたかを感謝する謙虚さにたどりつくのでしょう。〟

（まつい・ただし＝福音館書店相談役）

（四六判・一六〇頁・定価一〇五〇円〔税込〕・新教出版社）

神学ダイジェスト114号

急速な変化を遂げる現代社会。その中にあって、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2013年6月発行
A5判128頁
定価610円・送料80円

上智大学創立百周年によせて
教育特集―イグナチオ、ザビエルから二十一世紀へ―
上智大学創立百周年の歴史を未来につなぐもの　高祖敏明
イエズス会の教育とイグナチオ的教育法　イエズス会
キリシタン時代のイエズス会教育　尾原　悟
対話的宣教とイエズス会の教育　R・デ・ルカ
カトリック校の修道者と学生に　ベネディクト十六世
カトリック教育に関するバチカン公文書　浦　善孝
カトリック学校教育の宗教的次元（五）　カトリック教育省
神の言葉と聖画像の関係性　F・マルティネス＝メディナ
小特集　教皇辞任と新教皇選出　J・A・コモンチャク他

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044　Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail　shing-dt@netjoy.ne.jp

説教を通して改革者たちの姿を浮き彫りにする！

シリーズ・世界の説教 宗教改革時代の説教

出村 彰編

村上みか

本書は「シリーズ・世界の説教」の宗教改革篇である。一六世紀の宗教改革運動の中で生み出された説教が、ルターやカルヴァンらの宗教改革主流派からミュンツァーや再洗礼派などの急進派、さらに大陸を越えてスコットランド、イングランドに至るまで、多様な側面から紹介されている。

導入部の「宗教改革時代の説教の特徴」にも記されているように、宗教改革は聖書を教会の中心に据え、その説き明かしとしての説教を重視する礼拝のあり方を打ち出した。そしてその説教のあり方は、ルターによれば「キリストの生涯と働きとを表面的に……単にある物語や年代記としてのみ説く」のではなく、また「人間の法や教えを説く」のでもなく、聴く者の「信仰が呼びさまされ、保たれるように」キリストを説き、「主は私になにをもたらし、お与えになったのか」を明らかにすべきものと理解された（三三頁）。すなわち、聴衆はもはや秘跡を受ける受動的な存在ではなく、彼ら一人一人の信仰と生に実りがもたらされるよう、聖書の言葉を語ることが強調されたのである。この基本的な態度は、ここに紹介されているいずれの説教にも当てはまり、積極的に人々の生に関わっていこうとする改革者たちの強い姿勢が感じられる。今日なお、そのまま魂に響いてくるものも少なくない。

もっとも、その説教の内容は一様ではない。それぞれが聖書の言葉に拠りつつ、自らが置かれた状況の中で――すなわち改革期の混乱の中で新しい教会形成を行うというプロセスの中で――解釈を行い、その結果、多様な内容が示されることになる。たとえばルターやカルヴァンにおいては、いわゆる「宗教改革的神学」が説教の中に明確に表現されているのが見て取れる。罪の苦しみの中にある人間が、信仰によって義とされ、解放されること、そしてひとたび解放された人はこの福音に留まり、感謝と愛をもって自らの務めを十分に行うべきことが説かれる。とくにルターの場合、この福音に生きる新しいキリスト者の生がこの世と対立するものであることが強調され、キリスト者とは苦難の中を生き、それを誇るものであることが、力強く明快に語られる。一方、カルヴァンの場合、説教の内容が彼の体系化された神学と合致し、一つの説教が完結した神学内容を備えている。しかし、その論旨は明快で分かり易く、牧会的な配慮をもって語られている。ルターとカルヴァンにおいては、釈義と神学と説教のダイナミックな相互作用が感じられ、両者が優れた説教者であり、神学者であったことを改めて知ることになるだろう。

他方、改革者たちは内面的信仰に関わるものだけでなく、教会や社会の問題についても説教の中で積極的に発言していった。ツヴィングリはスイスが傭兵制度をもって絶えず戦争に関わる状況を前にして、キリスト教的信仰をもって正義を愛し、平和を回復することを説いたし、ブツァーはドイツとスイスの福音主義教会が聖餐論において一致し、和解することを説いた。またミュンツァーは神秘主義と黙示文学的終末論の影響の下、選ばれた民がこの世の悪を滅ぼし、神の国到来に備えることを訴えた。さらに再洗礼派のメノ・シモンズは、真の教会は悔い改めを経て洗礼を受けた者から成るものとし、幼児洗礼により社会の構成員すべてを教会員とする国教会のあり方を批判した。同様にイングランドの分離派の祖とされるロバート・ブラウンは、国教会から分かれて徹底した教会改革を行うことを主張した。いずれも人々に決断を迫る論争的説教である。

ルターによれば「真の霊的説教者」とは、人々に気に入られようと耳触りの良い甘い説教を行う「偽りの説教者」と異なり、罪と苦しみの中で悔い改め、罪から解放されることを説くものであり、この福音ゆえにこの世と対立する（八七―九一頁）。そのため説教には勇気と聖霊が不可欠とされるのであるが、ここに挙げられた改革者たちの説教には、まさにこの姿勢が一貫して感じられる。論争しつつ、新たな信仰と教会のあり方を求めて、困難な現実に関わっていった改革者たちの姿が、その説教を通じて浮かび上がってくるのである。

ただ本書の構成を見ると圧倒的にルターとカルヴァンの説教が多く、ほかの改革者たち、特に急進派のそれが少ない。後世への影響力や教化文学としての機能を考えるならば、それも一つの可能性かもしれないが、宗教改革全体を知る上では、正統派とされる側に偏った選択であるように思われる。伝統を重んじすぎることは宗教改革者たちがまさに否定したところである。また構成に歴史的な視点が反映されておらず、カルヴァンの後にツヴィングリが来ているのには違和感を感じるし、ミュンツァーやメノ・シモンズがロバート・ブラウンの後に来ているのも歴史的、地理的に不自然である。定式化された宗教改革理解が、新たな研究の成果によって修正される必要をも感じた。

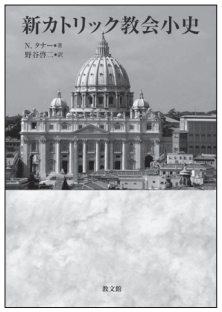
（むらかみ・みか＝東北学院大学文学部教授）

（A5判・四八六頁・定価四七二五円〔税込〕・教文館）

民衆に支えられた教会の歴史を学ぶ必読書

新カトリック教会小史

N・タナー著
野谷啓二訳



高柳俊一

青天の霹靂のようなベネディクト一六世の突然の辞任と南米からの新教皇フランシスコの出現等々、このところカトリック教会の話題が我が国のメディアでも注目を浴びている。本書の著者はイギリス人、ローマのグレゴリアナ大学教授である。原著は二年前の出版だったが、その邦語訳出版は偶然にも時機を得たものとなった。

二〇〇〇年のカトリック教会史を「小史」にまとめ上げるのは至難の業だと思える。著者は教会史を聖霊降臨の出来事から語り始める。本書の特徴は著者が教会史に芸術、文化の歴史を結びつけ、特に「民衆」の動きに注目していることである。古代ローマ帝国時代の迫害を受けた少数派非合法宗教から、公認宗教時代、東西教会がまだ一つの時期、ローマ帝国分裂から次第にゲルマン諸族の侵入に西方教会がローマ司教を中心に対応し、彼らを改宗に導き、西欧の精神的統一を果たし、中世を通して一つの宗教・文化圏を形成し、宗教改革の時代に至るまでそれが続いた。ここまでは「カトリック教会史」というよりはカトリック、プロテスタントが共有する西方キリスト教史である。

宗教改革の諸教派の出現はカトリック内部の刷新運動を引き起こし、新しい修道会が現れ、芸術、文化、学問における刺激となったばかりでない。ヨーロッパの大航海時代と重なり、トリエント公会議後の近代カトリック教会が世界を意識し、活発な宣教活動に乗り出す機会となった。その結果が現在の世界のカトリック人口をもたらした。

逆転劇は他にもある。カトリック教会は近代国家と激しく敵対した。フランス革命によって徹底的に痛めつけられた。ナポレオンは教会を復活させたが、教皇を幽閉し、皇帝の権威を認めるよう強要した。一九世紀のはじめには、教皇の権威は地に落ちていた。しかし教会は民衆の篤い支持を受け、かつ列強の司教たちは政府との対決でローマの権威を必要とした。一九世紀にはイタリア統一の運動によって領地を失い、教皇はみずから「ヴァティカンの囚人」となった。しかしその反面、かえって精神的権威が高められ、国際政治で一目置かれるようになった。

一九世紀末の第一ヴァティカン公会議は近代への対抗姿勢を鮮明にしたが、イタリア統一軍がローマに迫ったので休会とされ、以後再開されることはなかった。その開催七年前、教皇ピウス九世はキリシタン時代の二六人の日本殉教者を聖人に列する式典を盛大に祝った。教皇の権威の高揚は教会内の「近代主義」の浸透に対する過度の恐怖、「近代主義者」と疑われた人々への過酷な処断の裏面があった。著者が第二ヴァティカン公会議の推進に貢献したとして挙げているコンガール、リュバック、ラーナーたちは皆そのような処断を受け、被害を被った神学者たちであった。

第二次大戦におけるナチのヨーロッパ大陸席捲、戦後の東欧の共産主義支配はカトリック教会にとって大きな試練であった。イタリアの共産党の進出は、東欧と同じくもうすぐ共産党の独裁政権がイタリアで出現し、包囲されるのではないかとの恐怖感をヴァティカン聖職官僚に抱かせた。ヨハネ二三世は第二ヴァティカン公会議を招集してそのような恐怖感を打破し、新機軸によって信仰、無信仰の壁を除き、キリスト教と他宗教、カトリックと他教派の違いを乗り越えて全人類の幸福のために歩みを同じくするというヴィジョンを実現しようとした。

カトリック教会は、西欧の伝統的カトリック圏における低迷と教会が成長している新天地（南米とアフリカ）の際だった対照を示している。米国、ヨーロッパでは聖職者の不祥事が次々と暴露され、教会当局者に対する信頼はおおきく揺らいだ。ヴァティカンの組織改革と人心一新が待ったなしの急務である。カトリック教会は世界中に一一億の人口をもつ、文字通りグローバルな教会となったが、第二ヴァティカン公会議が目指した「アジョルナメント（現代化）」の完結までにカトリック教会はまだ多くの障害を克服して進んでいかなければならないのである。

（たかやなぎ・しゅんいち＝上智大学名誉教授）

（A5判・三二〇頁・定価三三六〇円〔税込〕・教文館）

東京神学大学の定期刊行物
目下発売中！

神学会・「神学」74号

「神学」は半世紀以上も読み
継がれた神学専門誌です！

特集テーマ「世界史と救済史」
—近藤勝彦教授献呈論文集—

世界史と救済史……近藤勝彦
コヘレトの時間認識と救済…小友 聡
新約聖書における創造と終末…中野 実
テモテへの手紙一3:1-13における監督、執事たち、執事である女性たちをめぐって……焼山満里子
あなたが救済史である…芳賀 力
歴史における偶然性の問題…神代真砂実
近藤神学の根本主張…西谷幸介
M.L.キングと非暴力…菊地 順
カルヴァンの希望の神学…関川泰寛
日本基督教団の「教会のかたち」…山口隆康
歴史の中に働く神……朴 憲郁
救済史と説教……小泉 健
（その他自由研究2本修論要約1本掲載）
■A5判・327頁・定価3,675円（税込）

総合研究所・「伝道と神学」3号

「伝道と神学」は東神大と教会を結ぶ
伝道実践と神学の雑誌です！

近藤勝彦学長　最終講義
十字架と神の国……近藤勝彦

日本伝道協議会九州大会記録
伝えるべきことは、ただ一つ…大住雄一
教団信仰告白の旗じるしにたって…棚村重行
神には礼拝、人には伝道…尾崎和男
キリストのからだをこの地に…川島直道
教区の現状と不可避な選択…北畠友武
神への愛・隣人愛としての伝道…齋藤真行

教職セミナー発題
マルティン・ヘンゲル『救済史』を読む…中野 実
説教における世界史と救済史…小泉 健
（その他研究論文3本、博士課程後期学生の諸研究も掲載）
■A5判・218頁・定価1,575円（税込）

お買い求めは
全国キリスト教書店または
本学へ直接お申し込みください
〒181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-30
東京神学大学 総務課
Tel 0422-32-4185 Fax 0422-33-0667
E-mail soumu02@tuts.ac.jp

ローティーンへの大きなエール
上遠恵子著

ひかりをかかげて レイチェル・カーソン いのちと地球を愛した人

川俣　茂

教育界で「理科離れ」が指摘されて一〇年以上経つであろうか。その一方で小中高生の間では、「環境問題」に対する関心は高い。地球温暖化、ヒートアイランド現象、リサイクル、二〇一一年三月一一日の東日本大震災による福島第一原子力発電所事故、最近ではＰＭ２・５……。「環境問題」は「時事問題」でもあるからなのだろうか。それだけ子どもたちの多くは「環境問題」を「身近なもの」としてとらえているといえる。しかしそのような「現象」に関心はあっても、その分野のパイオニアと呼ばれる人物あるいは古典的名著といったものには関心がないことが多いのが現実であろう。

この「ひかりをかかげて」シリーズは、「取り上げる人物に実際に影響を受けて生きてきた執筆者たちが描き出すローティーンに向けたキリスト者伝記シリーズ」とキャッチコピーが付けられている。その点でいうならば、本書は確かに「キリスト者伝記」なのであろうが、実際読み進めていくと、「単なる伝記」、レイチェル・カーソンという人物の生涯をただ単になぞるだけでは終わっていないことに気づかされる。読めば読むほど、レイチェル自身が伝えたいこと、それに加えて著者自身がローティーンに伝えたいこと、それぞれが浮き彫りになる、不思議な書物だといえる。

たとえば、著者とレイチェルとの出会い、自らが生涯をかけて追い続けることになる「テーマとの出会い」というような、「出会い」についてである。これこそ、ローティーンに向けたメッセージであり、エールだと私は理解している。ローティーンのほとんどはいずれ「進路開拓」「進路選択」を迫られる。そこには当然、「自らが生涯をかけて追い続けることになるテーマとの出会い」が必要となってくる。その「出会い」がいかに自分自身の人生にとって重要なものとなるのか、レイチェル本人と著者本人それぞれの経験、そしてレイチェルと著者との出会いの中から（本書中では直接記されているわけではないが）、本書の重要なメッセージとなっていると思うのは、教育現場に立つ者の深読みであろうか。それはともかく、レイチェルという一人の、いやレイチェルと著者の二人の経験が大きなエールとなっているのは間違いないであろう。

さらに深読みしてしまうならば、「環境問題」そのものへの関心喚起にとどまることなく、これも本書中では直接記されているわけではないが、「人と自然が共に神によって造られたものである」、「人が自然の中で生き、自然と共に生かされている」ということが、レイチェルと著者からの中心的なメッセージとして、本書を地下水脈のように流れているといえる。これは福島第一原発事故後だからこそ、より重要なメッセージとして語られているはずである。

また、本書の随所にちりばめられたレイチェル自身の著作からの引用、特に「自然」描写の文章が実に生き生きとしている。このちりばめられた「自然」描写の文章こそが、本書が「単なる伝記」にとどまることなく、ローティーンに「語りかける力」を持ち、本書に「いのち」を与えているようにさえ見える。と同時に、「自然に触れるには五感を全開して感じよう」というレイチェルの言葉（五五―五六頁）を紹介しているが、改めて考えてみると、これこそが現代、特に現代を生きるローティーンに欠けているのではないかとも思ってしまう。

最後に、著者がローティーンに、そして教育現場に向けた熱い想いを、自戒をもって受け止めたい。

「レイチェルが言うように、科学は生活の一部なのです。とくに未来を担う若い人たちは真実を解明する科学についてもっと学ぶようになってほしいと、こころから願います。そして教師や科学者たちが、子どもや市民にわかりやすい言葉で科学がほんとうはとてもおもしろい学問であることを教えてほしいと願うものです。」（六九頁）

（かわまた・しげる＝清教学園中学高校　中学宗教主事）

（Ａ５判・一二八頁・定価一二六〇円〔税込〕・日本キリスト教団出版局）

中村妙子が伝えるC.S.ルイスの心

ひかりをかかげて《第4回配本》
C・S・ルイス　よろこびの扉を開いたひと
中村妙子
本を読む喜び。本と共に成長して生きる感動。幼少年期に焦点をあて、『ナルニア国ものがたり』作者の「よろこび」の世界を共に辿る。
Ａ５判・１２２頁・１２６０円

旧約聖書を学ぶ基本図書、復刊!

改訂新版　聖書の基礎知識　旧約篇
C・ヴェスターマン　左近 淑／大野惠正 訳
旧約全体を鳥瞰し、個々の部分が聖書の中で持つ位置と意味を明らかにする。『聖書 新共同訳』に準拠し、横組みとなって待望の復刊。
Ａ５判・２８８頁・３９９０円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 FAX 03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp《価格税込》
http://bp-uccj.jp

ニューセンチュリー聖書注解 イザヤ書四〇—六六章

黙想から聖書に立ち戻り考察する注解シリーズ
R・N・ワイブレイ著
高柳富夫訳

大島　力

「ニューセンチュリー聖書注解」シリーズの旧約の部分に、待望の一冊が加わった。イザヤ書四〇—六六章は、「第二イザヤ」（四〇—五五章）「第三イザヤ」（五六—六六章）として、旧約聖書の中でも親しみのある部分である。しかも、著者は日本において旧約学を十三年に亘って講じたこともあるイギリスを代表する聖書学者R・N・ワイブレイである。評者は、一九七九年に東京で開かれた「国際聖書学シンポジウム」で「ダビデ、ソロモン時代の知恵文学」というワイブレイの講演を神学生時代に聞いたことがある。その時は、イスラエルからA・マラマット、ドイツからW・H・シュミットが来日し、また、日本側からは左近淑や石田友雄等が研究発表を行い、東京にいる神学生も国際的な旧約学の最先端に触れる機会であった。

ワイブレイの専門は知恵文学であり、同じシリーズで「コヘレトの言葉」を担当し、偶然であろうがその翻訳も今年完成し出版されている。知恵文学を起点にして、律法（五書）の斬新的な研究をなし、預言者の注解書も書くという英語圏における旧約学のオールラウンドプレイヤーの一人である。そして、とりわけ本書『イザヤ書四〇—六六章』は、注解シリーズの一冊でありながら、その後の研究も含めると、イザヤ書五三章の「苦難の僕の歌」に関して極めて大きな問題を提起した書物である。そのことは、訳者である高柳富夫氏も「あとがき」で述べている。

しかし、本書はニューセンチュリー聖書注解の編集方針に従う伝統的なスタイルを保持している注解書である。まず、イザヤ書四〇—六六章の本文を小単元に分け、その単元を概観した後、各節の注解を記している。その本文の英訳はRSVを提示しているが、しばしば別訳の可能性を示唆している。それゆえ、その日本語訳にはかなりの慎重さを要したと思われるが、訳者はその翻訳作業を、正確を期して行い、ワイブレイが特に注解の対象としている章句について「新共同訳」の訳文を丁寧に付している。このことは、聖書研究をする者、とりわけ説教者にとって大変有益なことである。

通常、イザヤ書四〇章以下をテキストとして説教をする場合、ワイブレイの分けた一つか二つの単元がテキストになると思われる。その本文の基本的な釈義を行う際に本書があれば、かなりの考察が自分自身で出来るようになっているのである。確かに、説教をするためには聖書テキストに関して「黙想」を積み重ね深める必要があるが、それが聖書本文から出発しているかどうか、あるいは結果として聖書本文から離れていないかどうか、常に検証されるべきである。最近の聖書注解、特に同じ出版局から出ている「現代聖書注解」（インタープリテーション・シリーズ）が、説教者の黙想を主に促すような内容となっているので、両者はかなり違うタイプの注解書であると言える。しかし、それゆえに両者は相互補完的であり、説教者にとって重要な二つのシリーズが日本語で読めるようになったことは歓迎すべきことである。

最後に、本書の特徴的見解の一つは、四つの「主の僕の歌」（四二・一—四、四九・一—六、五〇・四—九、そして五三・一—一二）で述べられている「僕」は同一人物であり、しかもそれは預言者第二イザヤ自身であるという説である。これは、従来から「個人説」「集団説」「メシア説」など、旧約学上の重要問題として長く論じられてきたものである。その中で「主の僕」を第二イザヤ自身とする説には一定の歴史的妥当性がある。ただし、ワイブレイは、最後の「苦難の僕の歌」に五二・一三—一五を含めず、五三章を第二イザヤの「友人たち」による「感謝の詩」であると述べている。この点については議論がある。

いずれにせよ、英語圏のイザヤ書四〇—六六章の基本的な注解書を適切な日本語に翻訳された訳者の労を多としたい。

（おおしま・ちから＝青山学院大学宗教主任、日本基督教団石神井教会担任教師）

（A5判・三七八頁・定価六五一〇円〔税込〕・日本キリスト教団出版局）

Soli Deo Gloria

序　論
〈改革派教義学〉第1巻
牧田吉和
Yoshikazu Makita

教会に仕える
教義学を問う！
教会形成の現場から，
教会形成に仕える
「教義学」とは何かを考える．

改革派教義学　全7巻
《内容案内進呈》
A5判・上製・函入
定価 4,200［本体4,000＋税］円
ISBN978-4-86325-046-8

株式会社　一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯　mobile.ichibaku.co.jp

木下の社会改革思想はどこから来たのか？
鄭　玹汀著

天皇制国家と女性
日本キリスト教史における木下尚江

山極圭司

米寿を迎えた今、本書を読む機会を得て、感慨様ざまだった。いろいろ新しいことも知り、考え、思い出し、懐しんだ。

戦争が終わって軍隊から帰り、大学を卒業、もう少し勉強しようと大学院に入った時、私が考えていた一つは、近代日本は何ものだったのか、ということだった。またアメリカとは何ものなのか、ということでもあった。マッカーサー元帥の支配が続いていたが、私たちの臨時の統治者はキリスト教徒の軍人だった。キリスト教とは、どういうものなのか。

私は「日本近代文学とキリスト教」というテーマをかかえて近代文学を読みはじめた。

昭和二五（一九五〇）年七月、笹渕友一著『北村透谷』（福村書店）が出て一読、感歎して笹渕先生をたずねた。先生は縁もなかった私を親切に指導して下さった。翌年の夏休み、先生に「木下尚江」について質問したのは、二、三冊の古い木下の著書を読んで興味を持ったからだったが、「私は何も知りません。しらべて教えてくれませんか」と先生は言って、その後、手にはいった関係の書を送って下さった。やがて私は、かなり夢中になって木下尚江を探索する学生になっていた。本郷の古本屋品川力さんなど、ありがたい協力者も現われた。『革命の序幕――木下尚江言論集』（創造社）を出したのは昭和三〇（一九五五）年二月だった。熱心有能な研究者が相ついで現われ、昭和四八（一九七三）年一二月には『木下尚江著作集』（明治文献）一五巻が完結、更に大事業『木下尚江全集』（教文館）二〇巻が平成一五（二〇〇三）年一二月に完結した。その頃はすでに木下研究者としての私の役割はほぼ終わっていた。

それから更に一〇年の月日が流れて、本書を手にした私は、読み通すのも骨が折れた。時間がかかった。しかしくり返し読んでいるうちに木下尚江がよみがえったのである。そして日本キリスト教界の指導者たちに関する様ざまなことも知った。たとえば武士道のこと。新渡戸稲造の『武士道』は、昔読んだ記憶があるが、植村正久、海老名弾正、大西祝らの武士道論は知らなかった。

また基督教婦人矯風会のこと。女性の政治的権利を求めた人びとのことと、それに対して内村鑑三が反対したことなど、興味をひく新知識をいろいろ与えられた。更に知りたいことも出てきた。多くの著名なキリスト教指導者たちと木下尚江との違いは明白だが、それはどこで、どうして、そうなったのか。

私は明治二（一八六九）年生まれの木下の場合、まず明治初期の学校体験が大きかったと思っているのだが、本書の著者の考えを知りたかった。

「禁酒主義ニ対スル妨害」という木下文がある。明治二五（一八九二）年一月、相馬愛蔵らの東穂高禁酒会に招かれて「禁酒主義の妨害」と題する一時間余の熱弁をふるった木下が、その後にまとめたもので、全集で一〇ページの長文で、またかなり難解な文章である。「第一章 宗教上の原因」から「第四章 風俗上の原因」まで、禁酒運動の前に立ちはだかる障害についての若い木下の見方、感じ方、そして当時の日本社会における酒害現象のあれこれもうかがえて興味深いが、本書では宗教上の原因として太古以来の「政教混合」の「神道教」をとりあげ、「社会のためにも皇室のためにも断然廃するべきだと」木下は主張した、と言い、木下の「禁酒主義」思想の要諦は、真の「政教分離」に基づく「宗教」改革を促すことにあったのだと断じている。

しかし「第一章 宗教上の原因」で述べられたのは、禁酒運動に従っている人の多くがキリスト教徒で、今の日本ではキリスト教の真性を知る人もまだ少ないから、とかく感情的な反発も生まれ、それが運動の妨害になっているので、目下の問題は宗教の異同ではないことを認識して、緊要な禁酒事業の研究に当るべきだ、ということだったのではないだろうか。

（やまぎわ・けいじ＝元白百合女子大学教授）

（A5判・四一二頁・定価四四一〇円〔税込〕・教文館）

渡辺善太著作選④
聖書論――聖書正典論
2/I
＊ヨベル新書16 ◎新書判・二五六頁・一、八九〇円〔税込〕
好評発売中！

収録エッセイ等
宗匠様とその周辺――ゼンダゴン・ギャラクシー　早川 敏
正典的聖書解釈と説教　関田寛雄
渡辺善太における現象学的態度　小林和夫
❶偽善者を出す処　好評発売中！　◎一、八九〇円〔税込〕
❸聖書論――聖書正典論　好評発売中！　◎一、八九〇円〔税込〕
❷現実教会の福音的認識、他　次回配本予定
⑫わかって、わからないキリスト教　近日配本予定

日本ケズィック・コンベンション
説教集2013
第一のものを第一に
生活・奉仕・地域社会

＊好評発売中＊
46判・188頁
1,300円〔税込〕

渡辺善太先生もケズィックで行われている聖書的説教（バイブル・リーディング）を推奨され、『聖書的説教とは？』で見事にその成果を展開されています。沖縄から北海道までの6地区10か所で開催された大会のメイン説教18篇を収録。

株式会社ヨベル　YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033　東京都文京区本郷4-1-1
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
＊自費出版の専門出版社＊

多様な論点を含み持つ刺激的な書！
上村敏文、笠谷和比古編

日本の近代化とプロテスタンティズム

間瀬啓允

今なぜ「日本の近代化とプロテスタンティズム」なのか。この大きなテーマのもとで、一体、何がどのように問われ、論じられているのか。読者には、ふつふつと興味が湧き出てくる。

はじめの「武士道とプロテスタンティズム」の章には、日本の近代化に貢献したプロテスタンティズムが、その入信者の数において武士階級の子弟が多かったことから、その貢献においてプラス・マイナスの「両義性」を擁してしまったこと（古屋安雄）、さらに日本の経済的近代化には、信義・信用の徳義という武士道の精神が、武士のみならず庶民にも受容されていたこと（笠谷和比古）が、説得的に論じられている。

次の「明治知識人とプロテスタンティズム」の章には、日本の近代化に果したプロテスタンティズムの役割を明快に論じた五つの論稿が収められている。佐野真由子は、徳川開明派の終焉と「静岡」の位置付けに触れて、「静岡」は安政の開明派幕臣たちが動かした日本の近代化路線の「死に場所」ではなかったか？　と問題提起をして、読者の興味を掻き立てる。魚住孝至は、明治末期に生きた魚住影雄がキリスト教信仰と人格についてどのように考え、国家主義の強まる社会にいかに対処したかを論じ、近代的な人の精神にプロテスタンティズムがどのように影響を及ぼしたか？　を読者に考えさせる。植木献は、柏木義円の言動と思想を結びつける接点が、彼の「肉体」肯定の議論にあったことを明確にし、その視座がキリストの体に連なる聖化をもってキリスト教の土着化を目指したところにあるという。ならば、この「肉体」がキリスト教の土着化の具体例であるとはどういうことか？　と新たな興味を読者に呼び覚ます。仲秀和の「漱石とキリスト教」、近代知性の基盤と漢学の学問的方法を論じた竹村英二の論稿も読み応えがある。

続く「キリスト教文化とその受容」の章には、異文化におけるキリスト教受容の実態を、長崎県平戸島の「根獅子キリシタン」とキリシタン末裔の集落である大阪府茨木市千堤寺を事例として、「実生化」という概念のもと柔軟に論じた論稿（長谷川［間瀬］恵美）、女性の視点からみたキリスト教の受容の仕方を、羽仁もと子が発刊した『婦人之友』と「友の会」活動を事例として明快に論じた論稿（森田登代子）、近代日本の女子教育を担ったキリスト教主義女学校が、欧米の作法よりも、日本の伝統的文化である生け花、茶の湯、礼儀作法を教えたという経緯を、明治の初期から今日に続く五つのキリスト教主義女学校を事例として詳細に論じた論稿（小林善帆）が収められている。いずれも豊富な資料に基づいており、啓発的である。

さらに続く章には、日本の近代化に大きな足跡を残したプロテスタンティズムが、なぜ日本には量的に根付かなかったのか？　ということの比較考証として、「近代化過程のブラジル社会における日系人の教育と宗教」（西井麻美）、「日本的プロテスタンティズムとブラジル移民」（根川幸男）、「アフリカの「エデン」、タンザニアからの日本近代再考」（上村敏文）の三つの論稿が収められている。どの論稿も綿密な実地調査のもと地球の裏側の「日本社会」を彷彿させる。

おわりの「科学と宗教」の章には、今日のプロテスタンティズムに残された課題を、「現代物理学と宗教の〈はざま〉で」思索した明解な論稿（佐治晴夫）が収められている。そこには「科学の中の宗教性」と「宗教の中の科学性」が比較考量され、科学的知見と宗教的感情の歩み寄りの可能性が示唆されて、課題としての宗教多元主義に一つの突破口が求められている。

ちなみに言えば、本書はあしかけ二年にわたり、京都の国際日本文化研究センターにおいて行なわれた学際的共同研究の成果である。多様な論点を含み持つ本書に、読者は間違いなく、知的にも情的にも十分な満足と興奮を覚えるだろう。

（ませ・ひろまさ＝慶應義塾大学名誉教授）

（A5判・四五〇頁・定価四七二五円〔税込〕・教文館）

齋藤孝志［著］◆エフェソ書に撤して聴く　＊好評発売中！

キリストの体である教会に仕える

清泉女子大学名誉教授
推薦のことばと応答：小野寺 功

確かな福音的響きを通して、真の教会とは何かを提示！　本書では「真のキリストの教会とは何か」が一貫して問われており、その最善の解決がパウロのエフェソ書の教会論の中にあることが、強い説得力をもって示されている。この先駆的な著書が、広く読まれ、心ある人の生きる道しるべとなることを心から期待し、推薦の言葉としたい。　＊ヨベル新書15　二三四頁・一、〇五〇円（税込）

齋藤孝志の本

［決定版］まことの礼拝への招き
レビ記に撤して聴く
西 満氏先生推薦：大変感銘を受けました。一見難解で敬遠されがちなレビ記の祭儀に示されている福音の奥義が、見事に分かりやすく解き明かされています。
＊ヨベル新書６・1,050円（税込）

［決定版］クリスチャン生活の土台
東京聖書学院教授引退講演
「人格の形成と教会の形成」つき
信仰生活の基礎をしっかりと建てあげるクリスチャンの５原則を語り手の名手が平易に、ストレートに、懇切に解き明かします！＊ヨベル新書６・1,050円（税込）

無限の価値と可能性に生きる
使徒言行録全説教
小野寺 功氏書評：齋藤師の本『全説教』は、…そのすべてを自己の問題として受け止め、教会の「いま・ここ」を踏まえた、現代日本における宣教論がめざされている。　＊ A5判美装・3,570円（税込）

株式会社ヨベル　YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033　東京都文京区本郷４-1-1
TEL03(3818)4851　FAX03(3818)4858
＊自費出版の専門出版社＊

韓国はなぜキリスト教国になったか

教会成長に取り組む前に読むべき教科書！

鈴木崇巨著

大川従道

ハレルヤ！　主の聖名を崇めます。私の仕えている大和カルバリーチャペルの昨年の教勢報告は、主日礼拝の出席者が平均人数一一三二人。祈祷会の出席者平均人数が四八二人。この他にインターネットによる礼拝や祈祷会の参加者がおりますが、出席者の数には加えておりません。主日礼拝は日曜の午前中に三回（七時、九時、一一時）、祈祷会は、水曜夜と木曜朝に行っています。他に、毎朝の早天祈祷会や金曜夜の準備祈祷会等もあります。「この教会の成長は、祈りを通して聖霊なる神様に働いていただいた結果である」と、牧師も信徒も言い合っています。しかし、その背後にある努力や工夫のほとんどは、韓国の教会から学んだことばかりです。

鈴木崇臣先生が、前回出された『牧師の仕事』（教文館）も大変すぐれた実践神学書でありましたが、今回書評を依頼された御著書『韓国はなぜキリスト教国になったか』は、私が書けるものなら書きたかったほどのテーマです。

私は韓国には、五九回訪問しました。そのほとんどは、教会成長研修でしたが、ご奉仕もいくつかありました。それらの講演者としての訪韓も、大きな学びになっています。もちろん、山中の祈祷院にも何十回も入って祈り込んできました。

さて、鈴木先生のご本は、正面から観た教会成長研究書ですが、実は、「ウラ」も書いてほしかった。すなわち「裏を見せ、表を見せて散る紅葉」ではありませんが、両方を表現して下さったらもっと良かったと、出版直後にお電話で失礼な書評を申しました。日本人はすぐウラを見たがる国民で、手品でも素直に楽しまないで、必ずウラがあり、タネがある、ゴマカサレないぞ、という姿勢で観るクセがあります。

私のように三〇年余もベッタリ学ばせていただいた者にとっては、その点で、少々もの足りない感があるのは否めませんが、大切なことは、吉川英治ではありませんが「我他皆師也」でなければ、決して、教会成長はしないということです。

鈴木先生は、一五歳のとき初めて行った教会が在日大韓キリスト教会であったとのこと。息子さんの一人は韓国籍を持つ女性と結婚され、娘さんは韓国人を母に持つ男性と結婚された。韓国は先生にとって知らない外国でありながら、いつの間にか親しい国になっておられる。これならこの本を書く資格がおありですし、本書は神の摂理の御手の中にあると確信しました。

どんな問題や壁があったとしても、隣の国がリバイバルを経験しているのです。謙遜に近づいたなら、日本の教会がやれなかったこと、やるべきことをいくらでも教えてくれるはずです。本書は、韓国教会が着実に実践し成果を挙げている秘訣をたくさん教えてくれます。教会成長に取り組む前に必ず読むべき教科書と言えるでしょう。読むうちに、胸が熱くなる。日本もこうなって欲しいという強い渇きが起こってくる。また、祈りたくなる。聖霊が御著を通して不思議を語って下さいます。

儒教の国と言われていた韓国が（実際は仏教も強い）、なぜわずか三〇年の間にキリスト教の国になったか、本書でその謎解きを楽しんで下さい。日本は、一パーセントの壁を破れない、宣教師の墓場だと言われてきましたが、いよいよ日本の国にも聖霊の働きが大潮のようにやってきます。教会成長はサーフィンのようなもの。波が来たら乗ればよい。考え込んでいるうちに波は消えてしまう。チャンスはめったになく、祈って備えなければ、この波には乗れない。並の準備ではいけない。神は日本の国をあわれみ、必ず恵みの波を下さる。それまでに、リバイバルの先輩である韓国から大いに学んでおきましょう。

オンヌリ教会の故ハ・ヨンジョ牧師（長老派）は、ある日、祈っていると、神が日本を熱く愛していることに気づき、悔い改められたそうです。「私は、日本を赦さない罪を示されました。皆さん、私（私たち）の高慢な罪、日本人を赦さない罪をどうか赦して下さい」と涙をもって語られた。韓国教会は、今も燃えている。

（おおかわ・つぐみち＝大和カルバリーチャペル主任牧師）

（四六判・二二八頁・定価二三一〇円〔税込〕・春秋社）

キリスト新聞社のDVD
Kirisuto Shimbun,Co.,Ltd.
▶説教を学ぶ最良の教材！
好評発売中！

3枚組

DVD 日本の説教者 第I巻

平野克己、関谷直人◉責任編集／解説

季刊誌「Ministry」（キリスト新聞社）の創刊と共に誕生し、本邦初の試みとして大変好評いただいたシリーズ「日本の説教者」がDVDセット全二巻として蘇ります！

■B5判ケース・DVD3枚組・付録冊子・5250円

【収録説教者】
Disc①（74分）＝加藤常昭（説教塾・主宰）、深田未来生（同志社大学名誉教授）
Disc②（66分）＝榊原康夫（日本基督改革派東京恩寵教会名誉牧師 二〇二三年一月逝去）、雨宮慧（上智大学神学部教授）
Disc③（66分）＝辻哲子（日本基督教団隠退教師）、加藤博道（日本聖公会東北教区主教）

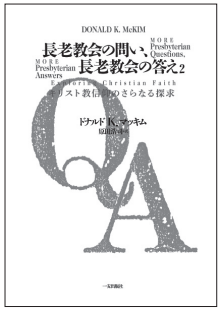
「第II巻」（DVD4枚組）は2013年夏発売予定！

キリスト新聞社
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51
和光プラザ 2 階
TEL. 048-424-2067（価格は税込）
E-Mail. support@kirishin.com
URL. http://www.kirishin.com

長老教会の問い、長老教会の答え2

キリスト教信仰のさらなる探求

歴史的信仰告白を現代に生かす
ドナルド・K・マッキム著
原田浩司訳



三好　明

本書はアメリカ合衆国長老教会の教職であるドナルド・K・マッキムによる、現代人のための信仰と生活のガイド・ブックであり、書名が示しているように、二〇〇六年に日本語版が出版された『長老教会の問い、長老教会の答え』（原著は二〇〇三年出版）の続編である。

本書の著者の基本的姿勢は「はじめに」に記されているように、アメリカ合衆国長老教会の『信仰告白集』を唯一の資料として、同教会および諸教会の信徒の教育に資する書物を記すということである。著者によれば、アメリカ合衆国長老教会は、一九六七年に『信仰告白集』を「教理上の信仰規準」として承認した。この『信仰告白集』は、ニカイア信条、使徒信条、スコットランド信仰告白、ハイデルベルク教理問答、第二スイス信仰告白、ウェストミンスター信仰告白、同小教理問答、同大教理問答、バルメン神学宣言、アメリカ合衆国合同長老教会信仰告白から成っている。これだけの膨大な歴史的信仰告白文書からなる「信仰規準」を、現代人は自らの信仰と生活にどのように適用していけばよいのであろうか。本書はこのような問いに積極的に答えようとするものである。

本書は七つの章から成っている。具体的には、第一章「長老教会について」（一～七問）、第二章「長老教会と他教派・他宗教」（八～一四問）、第三章「長老教会の神学」（一五～四二問）、第四章「キリスト者の生活」（四三～六三問）、第五章「礼拝とサクラメント（聖礼典）」（六四～七七問）、第六章「社会的・倫理的諸問題」（七八～八四問）、第七章「将来」（八五～九一問）という構成である。

著者は、わかりやすい問いと答えの形で、歴史的な信仰告白に基づいて現代人に信仰と生活のあり方を教えている。本書から、日本の読者が有益な示唆を受けると思われる箇所を私見に基づいてピック・アップしてみたい。

「わたしたちが神よりも何か他のものに依り頼むとき、わたしたちは偶像を崇拝しているのです。自分たち自身の能力や健康、地位や功績など、それが何であれ、わたしたちが依り頼むときに、そこに偶像崇拝が活きづいていきます」（問い二五「偶像崇拝とは？」）。

「わたしたちは、自分たちの命が『聖フランチェスコにある』とか『ジャン・カルヴァンにある』などと表現しようとは決してしません。二人とも死んだ人であり、過去の人です。しかし、わたしたちは、自分たちが「キリストにある」と言うのです。イエス・キリストは生きており、わたしたちと共にいてくださいます」（問い四三「わたしたちが『キリストにある』とはどういう意味か？」）。

「どれくらいの頻度でわたしたちは悔い改める必要があるのでしょうか？　毎日です。わたしたちは毎日罪を犯します。ですから、わたしたちは毎日悔い改める必要があります」（問い五五「幾たび悔い改めなければならないか？」）。

「説教の醍醐味は――説教者にとっても会衆にとっても――想定の範囲を超えて、思いもよらず見た目では明らかでない効果を聖霊が働かせてくださるところにあります」（問い七二「どうしたら説教は効果的になるか？」）。

「霊の自由（コリントの信徒への手紙二3・17）において、教会は言葉と行為でキリストの福音を宣べ伝えることによって、この世界に関与していきます。人間の罪によって社会の諸構造も影響を受けているがゆえに、それらに対する憂慮が、福音を宣べ伝えることや、神が愛する人々の健やかさに貢献する実行動へと導きます」（問い八〇「なぜ長老教会は、教会が社会において活発であるべき、と信じているのか？」）。

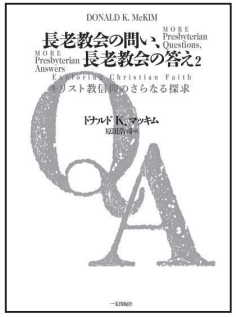
いわゆる簡単信条しか保持しない日本の主流派教会において、本書が読まれることにより、歴史的信仰告白に基づいて信仰と生活を建て上げていくことの大切さが認識されることを、願わずにはおれない。

（みよし・あきら＝日本キリスト教会忘木北伝道所牧師、日本キリスト教会神学校講師）

（A5判・一七四頁・定価二一〇〇円〔税込〕・一麦出版社）

Soli Deo Gloria

長老教会の問い
長老教会の答え2
キリスト教信仰のさらなる探求
ドナルド・K. マッキム
原田浩司［訳］



マッキムの長老教会シリーズ第三弾！

新たな「問い」に，
前著で取り上げた「問い」にも
視点を変えて，
わかりやすく答える．

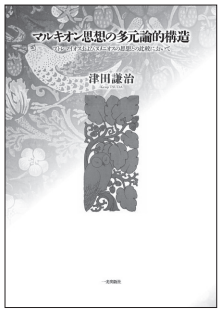
A5判
定価 2,100［本体2,000＋税］円
ISBN978-4-86325-053-6

株式会社　一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL（011）578-5888
http://www.ichibaku.co.jp
携帯　mobile.ichibaku.co.jp

キリスト教教理形成期における戦いと豊かさ
津田謙治著

マルキオン思想の多元論的構造

プトレマイオスおよびヌメニオスの思想との比較において



有賀文彦

本書を手にしたとき、まず心に浮かんだのは、「どうしてマルキオンなのか」という思いであった。マルキオンと言えば、教会の歴史を学ぶとき、初めの時期に固有名詞で登場する異端者の一人である。しかし、本書を読むうちに、キリスト教の思想的制度的枠組が形成されつつあった時代の教会の戦いと、その背後にある豊かさやエネルギーといったものに改めてふれる思いがした。「マルキオンがキリスト教における教理の形成期に投げかけた問題……は、正統信仰にとっては否定的な影響であったとしても、その意義は大きい」（二一頁）という著者の見解にもうなずかされる。

マルキオンについては、旧約の神と新約の神とをはっきりと分離し、旧約を除いた新約だけの独自の正典を作成したこと、そしてそれが正統教会における正典の制定を促したことはよく知られている。ただ本書では、そうした正典成立に関する面での影響には直接言及せず、その根底にある彼の二神論的な神観、多元論的な思想に光を当てている。

この点に関しては従来、新旧約聖書の解釈、グノーシス主義、そして中期プラトン主義などの哲学という三つの観点から研究されてきたが、それも二者（三者）択一的に影響を跡づけられるほど単純なものではないようである。そこで著者は、マルキオンとほぼ同時代、彼と同様に二神論的・多元論的傾向をもっていたプトレマイオスとヌメニオスという二人の思想家との比較を通して、彼の思想の特徴を明らかにする方法を取っている。三人の思想を個々の概念ごとに綿密に、丁寧に比較考察していく、その論述は非常に「面白い」ので、読者自身でお読みいただきたいと思うが、ここではその結論的な部分に簡潔にふれておきたいと思う。

「第一の神」と「第二の神」、「至高神」と「創造神」、「善の神」と「義の神」など、神的実在を二神論的に区別する点は、三人の思想家に共通している。しかし、至高神と創造神との間に、常に絶対的な対立や断絶を見るところにマルキオンの特徴がある。

プトレマイオスやヌメニオスの場合、区別はあっても、それぞれの神の間に断絶はなく、究極的にはすべてが第一の神、至高神に遡源されるとする一元論的な考えが根本にある。万物には常に至高神の摂理が働いているのである。

しかし、マルキオンはそうした一元論的な見方を完全に拒否する。創造においても、至高神はこの地上的な世界の生成には一切関与していない。善と義、福音と律法の関係においても、至高神の善は本来自らと関わりのない人間を救う慈愛そのものであるのに対し、創造神の義は裁く者として冷酷で残忍なもの、恐怖の対象でしかない。さらに救済に関しても、マルキオンの場合、創造の完成といった面は全くなく、善なる至高神が創造神とは全く別のところから、全く別の救済をもたらすと考えられる。まさに「同時代のプラトン主義に近似した側面を幾重にも包含しながらも、哲学的思考では汲み尽くせない特異性を孕んでいる」（二一七頁）思想と言えよう。

マルキオンは、どこからこのような「特異性」を持つ考えに至ったのか。著者は、一つには福音と律法の対立を挙げる。つまり、福音の示す「善の神」と旧約の「義の神」との間に、マルキオンは一貫性を見出せなかったということである。加えてそこでは、この世界に現前する悪の問題をどう考えるのかという神義論的な問いも契機になっていたのではないかと言われる。示唆に富んだ視点である。そして、こうした論述にふれながら、私たち自身は、いまの時代の中にあって自らの信仰をどのように言い表していくのか、改めて問われているように思われた。

著者がこのような堅実な研究を続けておられることに心から敬意を表するものである。さらに、その成果をこのような形で現してくださったことに感謝したいと思う。

（ありが・ふみひこ＝日本キリスト教会大垣教会牧師）

（A5判・二四九頁・定価四二〇〇円〔税込〕・一麦出版社）

今すぐアクセス！
●2013年1月号から前月号まで、ホームページで閲覧できます。
本のひろば ホームページ
http://www.bunsyo.or.jp
「キリスト教文書センター」のホームページから書評誌『本のひろば』をクリックしてください！
一般財団法人
キリスト教文書センター
〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL・FAX 03-3260-6520

■日本キリスト教団出版局

キリストの教会はこのように葬り、このように語る

加藤常昭著

聖書が語るいのちの約束。慰めの共同体がなすべき魂への配慮、葬りの形。実際に行われた九つの前夜の祈り・葬式を通して、人の思いにまさる慰めを豊かに伝える。

四六判・予232頁・2625円

聖書学古典叢書
ガリラヤとエルサレム――復活と顕現の場が示すもの

E・ローマイヤー著／辻学訳

復活したキリストが顕現した場《ガリラヤとエルサレム》に注目し、マタイとマルコは「ガリラヤ」、ルカ（福音書、使徒行伝）が「エルサレム」としたことにどのような意味があるのかを追究する。

A5判・160頁・3150円

■教文館

キリスト教古典叢書
パンセ

パスカル著／田辺　保訳

晩年のパスカルがキリスト教信仰の真実を説くために執筆した畢生の名著。ひとりの人間の魂の世界を反映した思索の集録、邦訳の決定版！

A5判・784頁・5460円

斎藤宗次郎・孫佳與子との往復書簡
空襲と疎開のはざまで

児玉実英編／斎藤宗次郎、児玉佳與子著

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」のモデルと言われる斎藤宗次郎が、戦中に、愛する孫佳與子と交わした往復書簡集。祖父と孫が織り成す愛と信仰の記録。

四六判・378頁・3150円

INFORMATION
近刊情報

■新教出版社

ローマ帝国とイエス・キリスト

磯部　隆著

かつての都市国家ローマがいまや世界帝国として確立する時期にイエスの生涯を重ね、超大国の支配の重圧に苦しむ民衆に寄り添う生き方としてイエスの宣教を捉える。

四六判・480頁・予価2500円

イエス・キリストの生涯

小川国夫著

カトリック作家小川国夫が、自らの信仰告白のようにして福音書を丁寧に読み解いた小川版「イエス伝」。一九八五年から八六年に『福音と世界』に連載され話題を呼んだ記事の単行本化。解説は勝呂泰氏。

四六判・232頁・予価1800円

■キリスト新聞社

教会では聞けない「21世紀」信仰問答Ⅰ
まずは基礎編

上林順一郎監修／かぴばらマンガ

『キリスト新聞』「教会質問箱」の単行本化。日常の教会生活や社会生活の中で直面する素朴な疑問や悩みにQ&A形式で専門家が助言。イラスト満載でわかりやすい！　求道者必携の書！

A5判・140頁・定価1890円

書店名	郵便番号	住　所	電　話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西６丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6　東北教区センター・エマオ1F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新宿2-8-2　千葉クリスチャンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://www/seikokai-pub.jp/	nskk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.jcom.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kirisutokyoushotenhanna@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7a.biglobe.ne.jp/~yokohama-cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00680-8-47
静岡聖文舎	420-0812	静岡市葵区古庄3-18-12	054-264-0264	054-264-4416		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsha/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		ktjordan@mbox.kyoto-inet.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakacbs	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-331-9933			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中区幟町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/^tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net./	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2134	浦添市港川2-25-1	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283
エマオ・BOOKセンター	904-0004	沖縄市中央3-14-2	098-929-3776	共用	http://www.okinawacbs.com/	emaocbs@yahoo.co.jp	

編集室から

「古代イスラエルの人々の時間概念とは、手漕ぎボートを漕ぐようなものである。……また、ここで述べられる『今日』とは、語られた当時の『今日』を超え、私たちが生きるこの『今日』ともなるのだ」

かつて、旧約聖書の申命記に関する講義で教えられたことだ。ヘブライ語では「前」を表す言葉（ケデム）が「過去」という意味をも、そして、「後」を表す言葉（アハリート）が「未来」という意味をも包含する、といった説明における言葉だったと思う。

「手漕ぎボートを漕ぐ」――つまりそれは、これまでの足跡が自分の前に広がり、自分の背後にこれからのときがあるということだ。それまでの歩みを見つめて洞察を深めるなかで、各々の出来事の意味や導き手を読み取り、それを背後にある未来へと委ねつつ後ろに向かって漕ぎ進んでゆくということだろう。「過去は自分の後ろに、未来は目の前にあるものだ」という先入観を持っていた私に、師の言葉は驚愕をもたらした。

話は変わるが、先日、第二次世界大戦時におけるBC級戦犯に関して学ぶ機会を得た。「BC級戦犯」、それは知識としては知っていたものの、何か自分からは遠い「かつて」のこととなっていた。しかし、裁判記録や実際にその舞台の一つとなったシンガポールで資料などを目にするなかで、「歴史的事実」とされてきたことが孕む矛盾、物事を一面的に見ることの恐ろしさ、あの出来事がいまだに与えている影響を思い知らされ、言葉を失った。

個人、家族、共同体、そして国家、それぞれに「過去」がある。その眼前に広がる「過去」から、何を学んで読み取り、それをどのように背後にある「未来」へとつなげ、託してゆくのだろうか。そして、いかにそれを「かつて」のことではなく、想起を通して「今日」のこととするのか。

いつもに増して戦争やその犠牲のことを思いめぐらす時期がやってくる。それを前にして、自分自身に改めて問うている。

（かとう）

新教出版社

福音と世界

2013年7月号

特集　教会とは誰か② 差別から考える

在日コリアン……金成元
沖縄……大城実
外国人被災者……許伯基
被差別部落……谷香澄
性的少数者……植田真理子

《好評連載》
語り継ぐ3・11⑦……大原敬
《新連載》
大正・昭和キリスト教の周辺……太田愛人

A5判・80頁・本体571円・〒68円
年間予約購読料〒共8,016円（消費税込）

歴史観とキリスト教

黒川知文 著

古代アウグスティヌスから、マルクス、ウェーバー、ルフェーブル、阿部謹也に至る歴史をめぐる思索の大河を、豊富な図版、図表を用いながら概観。

◎四六判・260頁・定価2625円

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1
TEL : 03-3260-6148
FAX: 03-3260-6198

日本キリスト教団出版局 〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18 TEL03-3204-0422 FAX03-3204-0457
e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp ホームページ http://bp-uccj.jp《価格は税込》

聖書学 古典叢書

ガリラヤとエルサレム

復活と顕現の場が示すもの

E.ローマイヤー 辻 学 訳

第3回配本

編集史的方法の先駆者ローマイヤーの古典的名著、本邦初訳！

復活したキリストの顕現した場《ガリラヤとエルサレム》に注目し、マタイとマルコは「ガリラヤ」、ルカ(福音書、使徒行伝)が「エルサレム」としたことにどのような意味があるのかを追究する。**◆A5判 上製・160頁・3,150円**

シリーズ好評発売中

福音書記者マルコ ――編集史的考察
W.マルクスセン 辻 学 訳 3,990円

石器時代からキリスト教まで ――唯一神教とその歴史的過程
W.F.オールブライト 小野寺幸也 訳 木田献一 監修 6,300円

キリストの教会はこのように葬り、このように語る

加藤常昭

悲しみにある人びとの魂に届く言葉を慰めの存在である教会が語る

キリスト教の死と葬儀の意味を聖書と歴史に立って語る。さらに、著者が9つの前夜の祈り・葬儀で語った言葉を収録。本書を通じて、慰めの共同体である教会の姿が鮮やかに浮かび上がる。

◆四六判 並製・272頁・2,625円

本のひろば
一九五七年七月一七日　第三種郵便物認可
二〇一三年七月一日発行（毎月一回一日発行）
第六六六号　二〇一三年七月号

6月の新刊のご案内

はじめてのウェスレー

W・J・エイブラハム　藤本満訳

ウェスレーの生い立ちから、アメリカにまで渡った宣教への熱意と挫折、メソジスト・ソサエティの形成や、聖化論や予定論などの神学的展開、そして「キリスト者の完全」を説く彼の倫理観・美徳観に至るまでを、ウェスレー研究の第一人者が書き下ろした入門書の決定版。

●1、995円

イラストで読む神学入門シリーズ

S・A・クーパー『はじめてのアウグスティヌス』　●2、100円
S・ポールソン『はじめてのルター』　●1、995円
J・P・バード『はじめてのジョナサン・エドワーズ』　●1、890円
J・R・フランク『はじめてのバルト』　●1、995円
R・バロウ『はじめてのキング牧師』　●1、995円

我はまことの葡萄の木

川田靖子

植物学者の父を持ち、植物にかこまれて過ごした日々、奈良県・稗田の環濠集落をめぐる追憶。明治以来三代続くクリスチャンホームの信仰を描く。

●1、575円

説教塾・教文館共催
ハイデルベルク信仰問答450周年記念公開講演会
主題「ハイデルベルク信仰問答と日本の教会」
日　時　9月30日（月）　10時30分～16時
場　所　キリスト品川教会（http://www.gloria-chapel.com/）
参加費　1000円
講演者　吉田隆氏（日本キリスト改革派仙台教会牧師）
　　加藤常昭氏（神学者、説教塾主宰）
※詳しくは教文館出版部のホームページをご覧ください。

境界を超えるキリスト教

明治学院大学キリスト教研究所編

――歴史を学び、未来をつくるために――

21世紀のグローバルな危機的状態に直面した今、境界を超え〈他者のための存在〉となることを目指し、歴史を学び、現代を読みとくために20人の研究者が試みる、多角的なアプローチ。

●3、675円

定価七五円（税抜七二円）（〒68円）
一年分一三〇〇円（送料共）

発行所　〒162-0814　東京都新宿区新小川町九―一　一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三―三二六〇―六五二〇　振替〇〇一七〇―五―一一六七九
発行人　本村利春　編集人　白田浩一　印刷所　㈱平河工業社
発売所　日本キリスト教書販売株式会社　電話〇三―三二六〇―五六七〇

教文館　〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549
本のご注文は〈e-shop 教文館〉へ！　http://shop-kyobunkwan.com/
e-shop教文館